

研究主題 難言教育の専門性の向上に向けて

団体の概要：東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会は、東京都の公立学校難聴・言語障害通級指導学級の研究会である。都内区市町村の小学校を11ブロック、中学校を1ブロックとして、ブロックごとに研究を行っている。例年、都難言協全体の研究発表は、該当するブロックが行っているため、今年度は3ブロック（多摩南ブロック・城西ブロック・城東ブロック）の研究と全難言協全国大会について報告する。

多摩南ブロック

「一人一人に応じた指導の工夫～多面的な観点からの見立てを通して～」

I 研究の目的

一人一人に応じた指導の工夫を行うためには、児童の実態を基にどのような指導をしたらよいかを適切に見立てることが必要とされる。そこで、主訴だけにとらわれることなく、多面的な観点を通して、様々な視点を取り入れた見立てを行い、指導を工夫していく必要があると考えた。今回の研究では具体的な指導に生かすための方法も深めたいという考えから、本テーマを設定した。

II 研究の方法

- ・2か年計画で研究を進めた。前期では見立てる力を付け、後期では指導の工夫を考えるという2段階で計画した。
- ・主訴が構音、吃音、言語発達の遅れの3事例について、事例ごとに分科会に分かれた。
- ・2年間を通して、早稲田大学教職大学院講師 長岡恵理先生に本研究の方向性や検討してきた3事例に対して御指導・御助言をいただいた。

III 研究の内容

- ・各分科会にて、事例について『見立て整理表』を活用して継続的に検討した。また、「見立て→指導（指導方針と内容、工夫）→見立て直し→指導の見直し」という流れを『サイクル表』にまとめた。
- ・必要な用語についてまとめ、共通理解を図った。

IV 研究の成果と課題

- ・『見立て整理表』を通して、新たな視点を取り入れた見立てを行うことができた。また、『サイクル表』を作成することによって、「見立て→指導の工夫→見立て直し」という流れで指導をよりよくしていくことにつながった。
- ・それぞれの観点について、具体的な見立て方をもっと深めていきたい。
- ・観点の内容についてもさらに検討していく必要があると考える。

城西ブロック

「聞くことや話すことに課題のある児童の理解と指導・支援～伝えたい思い・伝える力を高めるために～」

I 研究の目的

「きこえの教室と、ことばの教室で一緒に取り組みたい」「障害種別にかかわらず各学級の実態に応じて研究を進められるテーマがよい」という意見が出され、「聞くこと」「話すこと」に焦点を当てることにした。各校から出された事例について「ことばの表出が少ない児童」と「ことばの表出は多いが伝わりにくい児童」の2つのタイプに分けられるのではないかと考えた。

II 研究の方法

中央大学大学院教授の松井智子先生に2年間に渡って助言をいただきながら事例研究を進めた。共通の視点で事例を検討するために実態把握表を作成した。更に児童の実態が伝わりやすい表にするため、細かく分けていた「言語」の項目を「言語コミュニケーション」にまとめたことで、聞くことや話すことの課題が分かりやすく記載されるようになった。児童の実態を理解するために、『特別支援教育の理論と実践Ⅱ―指導 第4版』（田中容子・梅永雄二・金森克浩 責任編集／金剛出版）の「つまずきの具体像と原因」という表を共通の資料として使った。より詳しく把握するために「担当者の評価」という欄を設けた。

III 研究の成果と課題

（成果）発達特性の強い児童の言語発達指導では、画像や動画、パソコンのディクテーション機能などを活用することで、児童の集中力や自己モニター力を補助しながら言語理解力や表現力を高めることが大切であると分かった。児童の興味・関心をよく理解し話を共感的に受け止めるなど、指導者自身が話の聞き方を意識することで児童の伝えたい思いを高めることができた。チェックリストと実態把握表の活用により児童の実態を具体的に言語化でき、指導の工夫につながった。

（課題）実態把握に時間がかかり、指導・支援について研究する時間が十分に取れなかった。指導・支援まで見通した研究計画を立てる必要があった。指導の成果を児童の日常生活に生かせるよう、言語環境の調整や発達特性に対する支援が重要になる。家庭や在籍校との連携を図るには、難聴言語障害通級指導学級でのゴールを明確にしていくことが課題である。

城東ブロック研究会

「自分を知り発信できる力を育てるために」
～吃音や難聴のある児童への指導や支援を通して～

I 研究の目的

城東ブロックは3区6校からなり、難聴と言語障害学級が併設されている学級だけでなく、難聴のみ、言語障害のみの学級もある。指導対象が異なる学級があることから、これまで「個のニーズに応じた支援の在り方」という大きなテーマの下、各校での事例研究を中心に、ブロック研究会を行ってきた。研究を通して吃音であっても難聴であっても、児童にとって自己理解・自己認知が重要であるということが分かり、これらをキーワードとして研究を進めることとした。吃音・難聴のある児童が、将来、自立した生活を送るためには、自分自身の障害や状態について理解した上で、周囲に支援や配慮を求めると自ら環境に働きかけることが必要である。そこで、小学校段階から自分自身を知り、発信する経験を積むことができるように指導を行い、実践の共有を通して指導の充実を図っていくために、上記の研究テーマを設定した。

II 研究の方法

元きこえとことばの教室の教員 平永由美子先生、池田幸男先生より指導・助言をいただき、研究を進めた。

各教室から実践事例を持ち寄って発表を行った。その後、全20事例の発表をもとに実践を分類し、より指導に生かせる実践集を作るための分類研究に重点を置いて検討をした。実践の分類では、①実践のキーワードを挙げて共通する項目を抽出した。②抽出した項目から上位観点として整理した。③整理した観点ごとに、さらに下位項目にグルーピングし書式を整えるようにした。最後に、実践集と索引を用いて、実際に活用できるかどうか検証を行った。

検証では、各校から実践集に載っていない事例を持ち寄り、索引を使って指導の参考になる事例が実践集から検索できるかの確かめを行った。

III 研究の成果と課題

(成果) 「自分で発信する力」を育てるために考えたい観点が明確になり共通認識することができた。実践集の書式を揃えたり索引を作ったりする過程で、吃音や難聴の児童における指導について理解を深められた。複数の実践を共有することで、指導内容や児童が発信できる力を身に付けるまでの過程について知ることができ、指導の幅が広がった。

(課題) 児童自身が主体的に環境に働きかける力を育てることが今後ますます重要である。今回は集約した実践における分類・評価であったので、他の事例についての検証や評価の視点の見直しをすることで今後も研究を深めていきたい。

全難言協全国大会（東京大会） 7月28～30日

全難言協（全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会）の全国大会が東京にて開催された。全国から約760人の参加があった。

大会テーマ

「輪（つながる）～新しい時代へつながり、結び付ける～」

- 1日目：基礎講座（構音・吃音）
- 2日目：記念講演「すべての子供たちの学びの充実に向けて～適切な指導と必要な支援～」講師：大西孝志先生（東北福祉大学）
パネルディスカッション（難聴・吃音の当事者を迎えて）
- 3日目：分科会「難聴・構音・吃音・言語発達・読み書き・ICT・連携」
どの分科会も活発な意見交換がなされ、学ぶことの多い大会となった。

<令和7年度連絡先>

団体名		東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会	
代表者	所属	大田区立北糀谷小学校	
	職 氏名	校長 細井 鏡子	
	連絡先	03-3742-5371	
事務局	所属	大田区立北糀谷小学校	
	職 氏名	主任教諭 三田 徳子	
	連絡先	03-3742-1983	
団体ホームページ	URL	https://www.tonangen.com/	二次元コード
			